

3年2組

 「命をいただく」ということを考え 生きていくわたし
 ～ひよこの誕生 成長を見つめながら～


「命の針」が動き始めました!

5月19日、3年2組の教室で、「命の針」が動き始めました。

3年2組では、ひよこが生まれるかもしれない受精卵をいただける話があり、クラスで話し合った結果、ひよこの飼育に挑戦することにしました。

今か今かと待ちわびていた子どもたち。ついに卵がやってきました。担任が段ボールに入った卵を教室に運んでいくと拍手がわき起こります。箱を開けてみると中にあるのは茶色い卵。興味津々に見る子どもたちでした。普段見慣れているはずの卵でも、「大きさがそれぞれ違うよ」「よく見ると殻の模様もそれぞれ違う感じがする」と何か特別な感じがして愛おしく思っているようでした。

みんなで観察した後は、いよいよ孵卵器（ふらんき）へ投入です。20個なので、2人で1個ずつ、協力して入れていきました。割れないように、落とさないように、そっと孵卵器の中に入れる子どもたちは、卵の中の命をすでに感じているようでした。この日の振り返りに、Aさんは、「私の命と卵の命は同じ。全部生まれるかな。お母さんになったような気がした。2022年5月19日は記念日」と、卵に触れ、卵を温め始め、この日が特別な日になったことを感じていました。Bさんは、「この教室に38+20=58の命があると思うとドキドキする」と、卵の命を見つめ、共に暮らす日々の始まりを感じていました。



生命誕生の瞬間！命の尊さ！！

「先生、卵にひびが入っている」。Cさんが2時間目に発見したこのひび。ここから生命誕生までのカウントダウンが始まりました。明らかに内側から力でせりあがった卵の殻。しかし、見ても動きはありません。その日は動きがなく、子どもたちは下校しました。



次の日、孵卵器の中から声がします。中を見ると卵から出てきたひよこが孵卵器の中で鳴いているのでした。孵卵器の中を歩き回るひよこが他の卵をけとばさないために、35度に保ったこたつでつくった育成部屋にすぐさま移しました。



学校に来た子どもたちは、「あの卵から生まれた？どこ？」と聞いてきます。こたつ部屋の中にいる2羽のひよこに夢中になる子どもたち。登校してくる友だちに「ひよこが生まれたよ」と次々に口伝で伝わっていきます。

そんな中、3つ目の卵の殻がはがれ、中で動いている様子が確認できました。すぐさま、iPadをつなぎみんなでモニターを見つめます。8時37分、その瞬間がやってきます。ひびがだんだんと大きくなるにつれて、「がんばれ！がんばれ！」と子どもたちの応援の声が大きくなります。殻が割れ、身体の一部が飛び出た瞬間、教室中で歓声と拍手が沸き起こりました。

生命誕生の瞬間。普段目にしていない卵だけれど、中から出てきたのは紛れもない命。にわとりが命を削って生んだ卵です。

ひびを発見したCさんは「動物が苦手って言っていたけど、必至に頑張れって応援している自分がいて、前の自分がばかしく感じてきちゃった」と、命を感じ、過去の自分を捉え直していました。ひよこを目の当たりにしたDさんは「動画で見たひ



よこより、わたし的には何倍もかわいい。そのかわいさは考え事も悩みも飛ばすぐらいで、今日で何十回も『かわいい』というぐらいのすごさでした」と本物に触れ、感動したことを振り返りに綴っていました。

この日は給食中にももう1羽生まれました。ご飯を食べながら、今にも割れそうな卵を見つめる子どもたち。4羽目は、12時44分に生まれました。

Eさんは、この日の日記に「この世に生まれてこられるのは当たり前ではないから、この世に生まれて来てくれたひよこに感謝して、3年2組で、大切に、大切にひよこを飼っていきたいです。この世に生まれてきてくれたひよこ、本当にありがとう」と綴っていました。普段は感じる事が少ない命のありがたさ。けれど、生命が誕生することはとても尊いことだと、その瞬間に立ち会うことで感じていた子どもたちでした。

生まれてきた命 生まれてこなかった命



卵から生まれた5羽のひよこたち。教室で子どもたちに囲まれている中、すくすく成長していきました。しかし、いただいた20個のうち残りの15個の卵は孵化することがありませんでした。本来温め始めると21日で孵化する卵は、孵卵器に入れること34日。幾度となく孵化しない卵をどうするか話し合ってきた子どもたち。「もうお墓に埋めた方がいい」「まだ生まれるかもしれないじゃん」「孵卵器から出したらもう2度と生まれなくなるじゃん」など様々な意見が出ました。

そこで、卵をいただいた方に問い合わせたところ、「もう孵化することは無理だよ」と教えていただきました。その

事実を聞いた子どもたちは、15個の卵をどうするか再び話し合いが始まりました。

「お墓に埋めたい」「まだ生まれるかもしれない」「もう無理だって言われてるんだから早く埋めてあげたい」「お別れ会をしてあげたい」と意見が出ました。そして、話は孵卵器の電源を誰が切るかということへ。「先生にやってもらえばいい」という意見に対し、「自分たちで20個を育てるって決めたから自分たちの代表者が切るべきだ」という意見が出されます。そこで、担任から「代表が切るっていう話が上がっているけど、代表で切ってもいいという人はいる？」と問いかけると、「いいよ、電源切るだけだから簡単じゃん」と返答が返ってきました。すると、すかさずFさんが、「そんなに簡単に電源を切ってほしくない。ひよこだって頑張ってる生きようとしていたんだから楽な気持ちじゃなくて、ちゃんと考えている人に切ってもらいたい」と声をあげました。続けてGさんは、「生まれなかった命にも、ありがとうっていう気持ちをもって電源を切ってほしい」と続きます。もう生まれてくることはない15個の卵。けれども、命の針を動かした孵卵器の電源を切るという行為にも子どもたちの思いが表れます。担任からは、「では、今のみんなの話を聞いて、電源を切る『覚悟』がある人はいる？」と問いかけて、この日の授業は終わりました。正直、担任が切ることになるだろうと思っていましたが、子どもたちは「命に責任を持ちたい」「自分たちが選んだことなのに、先生に任せるのはおかしい」と担任の想像を超えて想いを語り合っていました。

その日の振り返りにHさんは、「たまごをどうするかは、3年2組次第だと思う。他の人が捨てるとなっても、3年2組はそんなことできない。たまごをお墓に埋めた方がいいと思う。あの人が言うから自分もするではなく、自分たちが決めるのが3年2組の役目だと思う」と綴り、言われたことをやるのではなく、自分たちが決めてやるのが責任であることを感じていました。Iさんは、「すごく悲しいです。電源を切ることは、まだまだ迷っています。5この命を大切にしていきたいことが、1番大切だと思いました。最後まで生まれない命を大切にすることも大切だと思いました」と綴り、今の自分たちにできる精一杯は何なのか考えていました。

次の日、覚悟があると手を挙げたJさんと、Kさん。Jさんは「ありがとうの気持ちをもって、切りたい」Kさんは「頑張ったねという思いを持って切りたい」とみんなの前で語ってくれました。2人の思いを聞き、「2人だったら任せられる」と



考えを受け止め、意見を返す仲間たち。息をそろえて電源を抜き、孵卵器は役目を終え、卵を温めることを停止しました。その日のJさんの日記です

「そっと…」

6時間目に、総合で、死んじゃったひよこたちに、お手紙を書き、孵卵器の電源を切りました。私は、「ありがとう。頑張ったね」という気持ちで、コンセントをぬきました。感謝の気持ちもあるけど、悲しい気持ちもあります。理由は、ずっと、温めてきた卵が入った孵卵器の電源を切るなんて。ひよこたちが、みんなのために、3年2組に来てくれたおかげで、みんな嬉しい気持ちになって、私は本当に幸せでした。だから、私も本当は、孵卵器の電源を切るなんて、できませんでした。私は、とても切ないです。だけど、がまんができてなくて、死んじゃったひよこたちに、どうしても私の気持ちを伝えなかったのが、かくごを持って、勇気を出して、電源を切りたかったのです。

命に対しての責任を果たそうと最後まで迷い、決断する姿にJさんの覚悟が伝わってきます。

この世に生まれてきた5羽はまさに奇跡の命なのだ改めて感じました。命はかけがえのないものだと改めて考えるきっかけとなった15個の卵。生まれてきた命と、生まれてこなかった命。私たち人間も、今こうして生きていることは当たり前ではないということを考えさせられます。嬉しいこと、楽しいこと、悲しいこと、苦しいことなど色々なことが日々あります。しかし、そうしたことを感じられるのは命あってこそです。自分の命、目の前の命、友達の命、食べ物としていただいているものの命。命を感じるからこそ、周りの命を大切にしていける心は育つのではないかと思います。

ひよことともに成長した4か月



3年生になって4か月。「あつという間だった」という声が子どもたちから聞こえてきます。ひよこと共に駆け抜けたこの4か月。ひよこの成長もさることながら、共に成長している子どもたちを感じました。

夏休み前には、ひよこたちを外へお引越しをしました。教室の中のケージは、ひよこたちにとって、狭くなったことや夏休み中も自分たちの手で世話をするためです。目をつけたのは自然体験園の小屋。おそらく昔、鳥を飼っていたと思われる小屋でしたが、地面はでこぼこ、扉は穴だらけでした。

子どもたちは分担を決め、この小屋のリフォームに動き出しました。ひよこ担当の人たちが、散歩させている間に、小屋チームは、せっせと土を運びます。暑い中、重たい土を運ぶのは重労働でしたが、汗水たらして作業をする子どもたち。おかげさまで、見違えるように地面が平らになりました。

穴だらけのドアも修復作業に入りました。Lさんは、「このドアに命かかってんじゃん。もしこれで襲われたら俺のせいになる」と言いながら、金網のすき間がないかどうかよく観察しながら作業していました。休日にもひよこの様子を見に来て小屋の心配なところを金槌で釘を打ち、修繕する姿がありました。1つの1つの作業に、ひよこたちの命がかかっているという言葉とその姿勢からは、この数か月間、命と向き合ってきたからこそその重みを感じます。

成長したひよこに顔を近づけ

「ひよこってあったかい」とつぶやくMさん。インターネットで検索すればすぐにでも、画像が見られる時代になりましたが、この本物の温かさは、本物に触れることでしか味わえません。本物の命と向き合った4か月間。この先も、どんな学びが待っているのか、子どもたちの学びは続きます。

